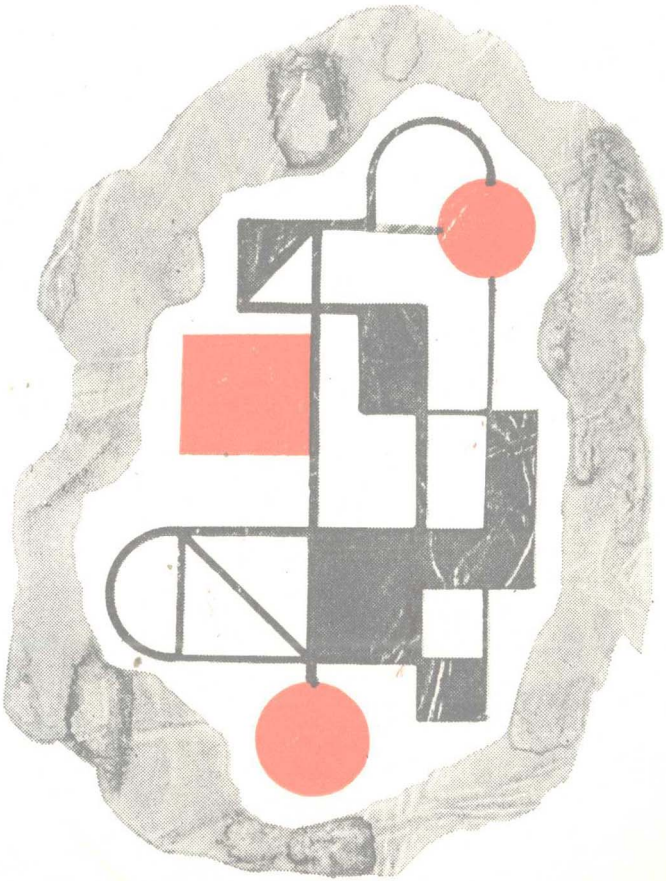
言語の構造 意味・統語 篇

——理論と分析——

柴谷方良／影山太郎／田守育啓



くろしお出版

言語の構造　意味・統語篇

——理論と分析——

柴谷方良
影山太郎
田守育啓

くろしお出版

はしがき

本書は言語学において密接な関係にある意味論と統語論の入門的解説書である。本書とその姉妹篇『言語の構造（音声・音韻篇）』によって，言語構造に関する中心的課題を解説しようとするものである。

本書で取り扱った統語論はチョムスキーによる生成変形文法の発達と共に過去25年間に大きな飛躍を見せた。それに伴って入門書もかなり出まわるようになったが，それらの多くは理論中心的なものであって，言語資料といえば，議論を支持するためのものに限られている傾向にある。また，資料も変形文法が英語を中心に発達した関係上，英語中心的である。

本書は，理論の解説だけに留まらず，現実の言語資料の観察・分析という方面にも重点を置いた。また，資料も日本語と英語の他，多くのタイプの言語から引いた。英語で顕著に現われないという理由で，あまり変形文法では取り上げられなかった現象も，他の多くの言語に見られるものは取り扱うよう心がけた。そうすることによって，言語現象と言語理論双方の理解が深まり，言語学読みの言語知らずに陥ることなく，英語や日本語だけに片寄った言語観から解き放されると信じるからである。このような理由から，各章の終わりには練習問題を附し，言語資料の実際の分析の機会を設けた。練習問題を本文の一部として取り組んでもらいたい。

意味論については残念ながら，多くの言語からの資料は求められなかった。これは，個々の言葉の意味について論じようと思えば，統語現象の理解以上にその言葉に精通していなければならないからである。従って，意味論では専ら

日本語と英語の資料に頼った。第1部で論じられている意味体系は多くの言語に通じるものと考えられるが，言語間の意味現象の違いなどの興味ある，そして重要な問題は今後の研究をまたなければならない。

本書は便宜上，意味論を第1部とし，統語論を第2部としたが，どちらを先に取り扱ってもよい。肝心なことは，これら2つの分野は密接に関連していて，一方の充分な理解には他方の理解も必要だということである。

本書はその理論的枠組みとして，生成変形文法を拠り処とした。しかし，先にも述べたように，本書は変形文法の理解を目的としているのではない。ここで取り上げた理論的枠組みは，言語の統語，意味に関する諸現象を理解する上での1つの手立てであると解し，それに固執することは避けるべきである。近年発掘されてきた広範な言語現象を包括的に取り扱うためには，変形文法やその他の現存する理論以上のものが必要であるということが感じられる今日においてこそ，のびやかな理論的態度を保たなければならない。

一般教養として言語学を学ぶ読者にも，また言語学専攻を志す諸君にとっても，本書が言語の本質を探る上での手引きとなれば幸いである。

昭和57年8月

柴谷　方良
影山　太郎
田守　育啓

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　　次

はしがき …… 3

総　　論

1. 「意味論」と「統語論」……11
2. 文法における意味論・統語論の位置……15

第1部　意　味　論

第1章　意味論とは何か ……19
1.1　意味論の対象……20
1.2　意味論の目的……21

第2章　意味の分解……25
2.1　成分分析の考え方……25
2.2　成分分析の実際……30
2.3　意味成分の性質……37
練習問題……40

第3章　語と語の関係Ⅰ：パラディグマティックな関係 ……45
3.1　意味の場……45
3.2　単語間の意味関係……49
3.2.1　意味の類似……49

3.2.2　意味の対立……54
3.3　同音異義性……60
3.3.1　曖昧性……60
3.3.2　不明確さ……63
練習問題……66

第4章　語と語の関係Ⅱ：シンタグマティックな関係……70
4.1　イディオム……71
4.2　選択制限……74
4.3　選択制限のいろいろ……81
練習問題……85

第5章　文と情報……88
5.1　文の意味……88
5.2　前提と含意……90
5.3　新情報と旧情報……100
5.4　焦　点……106
練習問題……109

第6章　語用論：ことばの使い方……113
6.1　ことばと場面……115
6.2　発話行為……125
6.3　会話の含意……131
練習問題……136

参考書について……140

第2部　統　語　論

第1章　統語論とはなにか …… 143
1.1　統語現象…… 143
1.2　言語能力…… 147
練習問題…… 154

第2章　文の構造…… 155
2.1　句構造分析…… 155
2.2　構造上の曖昧性…… 167
2.3　句構造規則…… 170
練習問題…… 179

第3章　表層構造と深層構造 …… 186
3.1　句構造分析の限界…… 186
3.2　より深い分析へ…… 193
3.3　深層構造と変形規則…… 202
練習問題…… 209

第4章　統語現象 I …… 213
4.1　語　順…… 213
4.2　格表示…… 227
4.3　一　致…… 242
練習問題…… 263

第5章　統語現象 II …… 270
5.1　受動文…… 270
5.2　代用表現…… 278
5.2.1　再帰代名詞化…… 278
5.2.2　代名詞化…… 288
5.2.3　動詞句の代用表現…… 292
5.3　削　除…… 295
5.3.1　英語命令文の主語…… 295
5.3.2　等位構文…… 299
5.3.3　比較構文…… 305
5.3.4　補文構造…… 309
5.4　繰り上げ…… 314
5.4.1　主語繰り上げ…… 314
5.4.2　難易文（Tough 移動）…… 324
5.4.3　動詞繰り上げ…… 327
5.4.4　規則の適用順序について…… 332
練習問題…… 340

第6章　統語現象 III …… 347
6.1　不変化詞移動…… 347
6.2　与格移動…… 350
6.3　数量詞の遊離…… 353
6.4　話題化…… 357
6.5　疑問文…… 361
6.6　関係節…… 366
6.7　外　置…… 374
6.8　分裂文…… 379

6.9　There 構文 …… 380
6.10　統語規則の機能と意義 …… 382
練習問題 …… 387

第7章　統語制約 …… 396
7.1　島の制約 …… 396
7.2　表層フィルター …… 401
7.3　機能上の諸制約 …… 406
練習問題 …… 410

第8章　統語構造と意味 …… 414
8.1　深層構造と意味 …… 414
8.1.1　格文法 …… 414
8.1.2　生成意味論 …… 419
8.1.3　生成意味論の問題点 …… 426
8.1.4　語彙分解と意味解釈 …… 429
8.2　表層構造と意味 …… 431
練習問題 …… 443

参考書について …… 445

事項索引 …… 448
言語索引 …… 451

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

総　　論

1. 「意味論」と「統語論」

言語とは音声と意味という二面性を持った組織的な体系である。単語という単位を例にとってみると，例えば「本」という語は［hoŋ］という音声的側面と「通常は印刷された頁をまとめた云々」という意味的側面を持っている。このように単語１つだけを取り出してみた場合には，音声と意味の関係は表裏一体となっていて明確なものであるが，いくつかの単語が並べられ，言語がより複雑な思考を表出する機能を帯びると，音声と意味の関係も複雑なものとなる。同じ「本」の発音でも「本とノート」という組み合せでは［hon］となり，「本もノートも」では［hom］，「本を買った」では［hoõ］となる。このような音声面における現象は本書の姉妹編である『言語の構造―理論と分析―（音声・音韻篇）』（くろしお出版）で取り扱われている。

本書で取り上げられるのは言語の意味的および統語的側面に関する問題である。個々の単語はそれぞれの意味を持っていると先に述べたが，単語の意味とはどういうものかということがまず問題になる。普通我々は意味などというものはただ単に物事を表わすという程度にしか考えたことがなく，はたして意味の実体，ましてや分析ということなど考えも及ばないと思いがちであるが，事実個々の単語の意味それだけを追求するということは難しいことである。しかし，１つの単語と他の単語とを意味の側面から比較・対照しながら意味というものを追求することによって，単語間の意味の類似性・相違点が見い出され，

徐々に各単語の意味を形成している要素が浮かび上がってくる。例えば,「犬」,「人」,「ネコ」,「ライオン」,「机」,「本」という単語のグループを見た場合,「机」と「本」は他の単語とどこか意味的に違うと直観的に感じるであろう。もちろんこの場合は,「犬」,「人」等は生き物を指しているのに対して「机」,「本」は無生物を指しているという点で違っているわけであるが,このことから,前者の語には<生物>という意味要素が存在し,後者の語には<無生物>という要素が存在する,ということが想定される。

意味論はこのような方法を用いて個々の単語の意味ばかりでなく,文節や文といったより大きな単位の意味も対象にする。まず,個々の単語の意味は単語間の意味の類似や相違を表わすだけでなく,大きな言語単位の構成にも影響を及ぼす。上に見た<生物>・<無生物>という要素は存在動詞「いる」・「ある」の選択に関わっていて,<生物>という要素を含む語は「いる」を,<無生物>という要素を含む語は「ある」を要求する。従って,「あそこに犬が1匹いる」,「あそこに本が1冊ある」は適格な文であるが,「あそこに犬が1匹ある」や「あそこに本が1冊いる」は不適格な日本語文である。*

次に文の意味ということについて考えてみよう。普通,文の意味は個々の単語の意味から成っていると考えられているが,文の意味とそれを形成している単語の意味との関係は必ずしも明確なものではない。極端な場合にはイディオムのように,その意味とそれを形成する単語の意味とがまったくかけ離れることがある。例えば「太郎は今日も一日中油を売っていた」というイディオム「油を売る」を含んだ文,特に「油を売る」という部分は「油」,「を」,「売る」という個々の語の要素の意味とは何ら関係がない。その証拠に,「油」という語がその意味で使われている文では「油」を同義語「オイル」で置き換えても

---

* 存在動詞「いる」・「ある」の選択に関しては,植物は<無生物>類に属する。生物学その他の学問分野における分類と,言語上の分類とは必ずしも一致するとは限らない。また,「バスがいる」のような表現も可能である。

同じ意味の文が得られるが（例，「プロレスでは体に油を塗るのは禁止されている」・「プロレスでは体にオイルを塗るのは禁止されている」），先の文を「太郎は今日も一日中オイルを売っていた」に直すと，イディオムの意味が伝わらなくなる。このことは「売る」を同義語「販売する」と置き換えても同様である。

また，文の意味が単語の意味の総和でないということは，「太郎は花子を愛している」という文と「花子は太郎を愛している」という文を比べても判る。これら2つの文はまったく同じ単語から成るもので，もし文の意味が単語の意味の総和であるならば，2文は同じ意味を表わさなければならないが，これらは明らかに違った意味を表わしている。このことから，文の意味は文の構造と関係があるということが判るが，文の構造を対象にした研究分野が統語論である。

或る一定の意味を持つ単語をただ単に並べただけでは適格な文とはならない。例えば，「は太郎を愛している花子」は日本語の文としては明らかに不適格なものである。つまり，文というものは或る一定の法則に従って単語が配列されたものであるということが言えるが，この文法的に適格な文を支配する法則を明らかにするのが統語研究の目的である。統語的に不適格という文には上の例のように語順が不適切なもので意味も判らないものばかりでなく，例えば「太郎$_i$は太郎$_i$をうらめしく思っている」* や I want I to go などのように，意味的には明確なものもある。これらは，それぞれ「太郎は自分をうらめしく思っている」，I want to go という形に直さなければならないが，このような表現の適格性を支配するのもまた統語規則である。

このように，1つのまとまりのある意味は文という形式を通して（最終的には声の連続として）表わされるのであって，意味の表出は文の統語的適格性に依存しているが，文の統語的適格性と意味とは独立した概念である。「は太

---

* 「太郎$_i$」という表示は重出する名詞が同一人物を指しているということを表わす。

郎愛しているを花子」は意味的にも統語的にもおかしいが，有意味でなければ統語的にも不適格であるとは言えない。日本人であれば，「ヒラミヤがパミヤをヒッカリコマタキした」と聞けば，意味は判らないが，文としては日本語文の形をしていると判断するであろう。このことは文の形式をつかさどる統語法は意味と独立しているということを示している。先の「太郎$_i$は太郎$_i$をうらめしく思っている」やI want I to go なども「太郎は次郎をうらめしく思っている」やI want John to go と関連させて考えれば判るように意味的には何ら問題はないのであるが，統語的に不都合なのである。

文を意味と統語の両面から考えると次の4つの基本的タイプが見られる。

（1） 意味的にも統語的にも適格なもの。

（例「太郎は花子を平手打ちした」）

（2） 意味的には適格だが統語的に不適格なもの。

（例「太郎$_i$は太郎$_i$をうらめしく思った」）

（3） 意味的には不適格だが統語的に適格なもの。

（例「太郎は花子を膝で平手打ちした」）

（4） 意味的にも統語的にも不適格なもの。

（例「膝で花子は平手打ちしたを太郎」）

以上の他に次の文のように，文の形も正しく意味も明白であるが，現実世界では起こり得ない状況を表わした意味的に変則的な文も存在する。

（5） 意味的に変則的なもの。

（例「椅子が太郎にかみついた」）

また，意味的な適格性および統語的な適格性という観点以外に，文の形式と意味との関係には次のようなものがある。

（6） 両義的関係

（例「太郎は花子に自分の部屋へ行かせた」）

（7） 同義的関係

（例「太郎は花子を愛している」＝「花子は太郎に愛されてい

る」)

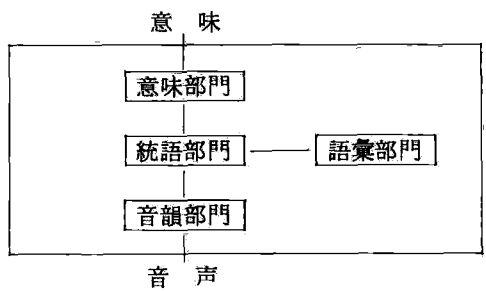
(6)に挙げられた例文は，太郎が花子に前者の部屋へ行かせたという意味解釈と太郎が花子に後者の部屋へ行かせたという解釈が成り立つ。このように，或る種の文は2つの（またはそれ以上の，つまり多義的な）意味と関係している。一方，(7)の場合は，形式的に異なる文が同じ意味を表わすという，同義的な関係を示している。

意味論・統語論は上に示されたような現象を支配する原理を体系的に記述・説明することを目標としている。

2. 文法における意味論・統語論の位置

音声と意味を結びつける組織的な体系である文法の全体的な機構において意味論・統語論はどのような部門に関与するのかという点を最後に述べておこう。

まず，文法機構は互いに関連するいくつかの部門から成っていると考えられている。これらの部門および部門間の関係は次図のように示すことができる。



〔図1〕文法の機構

文法機構の片方には意味部門があって，これは意味と直結している。もう1つの端には音声と直接に関係する音韻部門がある。これら2つの部門は統語部門の媒介によって関係づけられている。統語部門はまた語彙部門とも直接関係

を持っている。1つの言語に使われる個々の語はそれぞれの特質を明示した形で語彙部門に納められている。つまり語彙部門は言語の辞書のようなものである。ここに納められている語には3種類の情報が明示されている。それらは，意味に関する情報，統語特徴に関する情報，および発音（つまり音韻的特徴）である。例えば，「犬」という語に対しては，それは「4つ足の動物で…云々」といった意味情報が与えられている。また「犬」は名詞という統語範疇に属するといった統語情報も与えられている。そして最後に，「犬」は inu と発音されるという音韻特徴も示されている。

本書は2部に分かれている。第1部「意味論」では，語彙部門に納められている単語の意味情報をはじめに述べ，次に意味部門の働き――つまり文の意味解釈，文の意味的・場面的適格性を決定する諸要因――を検討する。

第2部「統語論」は統語部門の働きを掌握する原理の解明にあたるが，文の形式面における適格性の問題ばかりでなく，上の(6)や(7)に挙げた，統語形式と密接に絡み合った意味現象も取り扱う。

語彙部門および統語部門の働きによって作り出された文は一方では意味部門の働きによって，その意味が決定され，他方では音韻部門の働きによって，音声的に具現化される。音韻部門および音声学については姉妹篇で詳しく取り扱ったのでそちらの方を参照されたい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com